
ガラクタノカミサマ

ヒトリネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラクタノカミサマ

【Nコード】

N1864E

【作者名】

ヒトリネコ

【あらすじ】

『カミサマ』 それは、この国を管理し、未来を予知する大規模な人工知能群。『巫女』 それは、カミサマの声を聞き、人々に伝える唯一の人間。カミサマと巫女は、この国の未来への道標となり、人々はそれに従って暮らしていた。たとえそれが、いかなる“犠牲”を伴うものであろうとも……。これは、一人の少年“麻生 ケイスケ”が妹の笑顔のために、カミサマと戦う物語。これは、ClairvoyanceさんのFLASH「ガラクタノカミサマ」を元にして作った小説です。

プロローグ（前書き）

1話～3話まで、原作のFLASHとまったく同じものです。

プロローグ

ダンッ！銃声が響いた。

大勢の男たちに、一人の少年は一発弾丸を撃ち込まれた。

「うつ．．．。ちくしょう．．．。」

ケイスケは腹から血を流し、倒れた。

「諦める。」

周りを囲む男たちが、話しかけてくる。

「うるさい．．．。」

「諦める。麻生^{あしやう}ケイスケ。」

しつこく話しかけてくる。

「黙れ．．．。なんでエミが．．．。」

その瞬間、彼の頭に、猫を抱いた妹と一緒に撮った写真がよぎった。

しかし、それを遮るように、男たちは話を続けた。

「カミサマと巫女様が、私たちを理想郷へと．．．。」

彼は無視して、話し出した。

「エミを．．．返せ．．．。」

必死に訴えた。

「妹を．．．返せよ．．．。」

しかし、誰一人として、彼を救ってくれる人はいなかった．．．。

そのまま、周りの連中は去っていった。

「エミを．．．妹を返せ．．．。」

一人で、痛みに苦しみながら、訴え続けた。

「エミを．．．かえ．．．せ．．．。」

少年は、そのまま意識を失っていった。

瞳に一枚の写真の残像を残して．．．。

カミサマのおひざもと

ここは、カミサマが人々を導き、築き上げた未来世界。
いたる所に、街を移動するための橋が張り巡らされている。

その世界の中心には、広い平地に建てられた、人が入ることは禁じられている、カミサマが祭られている建物“神社”がある。

建物の中では巫女様がカミサマの声を聞いて、人々に伝えられている。

大きなモニターを見ながら、巫女様がカミサマに語りかけていた。

「カミサマ……。もうすぐこの国は理想郷へ辿り着きます。私たちがずっと願ってきた……。理想郷に……。」

その頃、橋からこの街を見下ろしている一人の少年がつぶやいていた。

「“カミサマのおひざもと”……。か……。ほんと凄まじい勢いで発展したもんだ……。でも、この街の人たちの、笑顔は見たことがない。」

彼は、街の人ごみに目をやり、言葉を続けた。

「まるで操り人形だな……。みんなカミサマの言われたとおりに行動する。たとえそれが……。」

そこで彼は、剣に映った自分の顔“麻生ケイスケ”を見て、最後に言葉を放った。

「だれかの命を奪うことでも……。」

すると、ケイスケには誰かが言い合いをしているのが聞こえた。

「ん？この街で、喧嘩は珍しいな……。」

ケイスケは、その会話に耳をやった。

「なんだよこいつ。」

「巫女様の言うこと、無視するのか？やめとけて。」

「こいつに何を言ったって無駄だ。」

一人の少女が、三人の少年たちにいろいろ言われていた。でも、少女も口を開いた。

「うるさい！未来の為とか言っつて、カミサマはパパとママを殺したのよ！」

彼女は泣いていた。親との思い出をおもいだしていたのだろう・・・。

そう・・・かつてのケイスケのように・・・。

しかし、それを打ち消すかのように、一人の少年が言った。

「それで？カミサマに復讐でもするか？」

彼らは、少女を置いて後ろへ歩き出し、ひとこと言った。

「どうせカミサマに逆らったつて、俺たちには何もできやしねえんだよ・・・。」

少女は、齒を噛み締め、悔しがっていた。

少年の想い

満月の夜・・・麻生ケイスケは、神社へ向かった。

カミサマと決着をつけるために・・・。

しかし、そこには喧嘩をしていた少女がいた。

その手には、銃が握られていた。

彼女も、神社へ向かっているようだ。

「これ以上、無駄な血をながすわけにはいかない・・・。」

ケイスケは、少女を入り口で待ち伏せることにした。

少女が前を通ると、彼は彼女に声をかけた。

「何してるんだ・・・。」

少女は、ハッと彼に気づき、足を止めた。

「ここで見たことは黙っておいてやる。今すぐ引き返せ。」

目をつぶって、少女に話しかけた。

すると彼女は、手に持った銃を彼に向けた。

「こないで！あんたみたいな子供に何がわかるの！」

銃を握ったその手は、恐怖で震えていた。

「子供・・・か・・・。」

ケイスケはゆっくり目を開くと、その瞬間、少女の手に握られてい

た銃は、彼の剣によって二つに斬れた。

「おまえみたいな子供に何ができる？消されて・・・それで終わり

だ。」

少女は、何もできない悔しさに涙しながら、走り去っていった。

彼はまた目をつぶり、妹と一緒に撮った写真を思い出しながら、心

の中で妹に話しかけていた。

「これでよかったんだよな。今から・・・俺が・・・おまえを助け

るからな・・・エミ・・・。」

彼が目を開き、剣を構えると、もう夜は明け、神社の前に何体も警備ロボが立ち並んでいた。

警備ロボに装備されているマシンガンが、一斉に銃声を鳴らし始めた。

嵐のように飛び交う弾を、彼は目にも留まらぬ速さで避け、一瞬で全ロボットを一刀両断で全滅させた。

それだけでは、相手も諦めず、飛行ロボットを送り込んできた。そのロボットも同じ武器が装備されており、一斉射撃をくりだしてきた。

しかし、それにひるむことなく剣にエネルギーをためて、それを放ち、ロボットを全滅させた。

神社の中では、巫女様が大きなモニターを見ながら、つぶやいていた。

「人間は愚かだ。絶えず争い、そして滅びを繰り返す……。だから、私がカミサマの声を届け、民を導いていく。」

巫女様は、そう言うスイッチを押した。すると、手元のモニターは赤く染まり、「抹消セヨ」と書かれていた。

外では、ケイスケの前に、戦闘用ロボが立ちはだかっていた。

さすがにそれには、苦戦したが、相手の打撃をジャンプで避け、そのまま剣にエネルギーをため、ジャンプ斬りでとどめを刺した。

神社に入ろうとしたら、周りに大きなモニターが出ており、そこにはあの時の少女が肩から血を流して、映っていた。

その子に銃を向ける一人の大人が言った。

「悪く思っな。これも巫女様が伝えた。“カミサマのおぼしめし”だ。」

その瞬間、一人の少年が、銃を持った男の腕に飛び掛かり、しがみついた。

「くっ……！」

その少年は、あの時、少女と口喧嘩をしていた少年の一人だった。しかし、その少年は銃を持った男に振り払われ、少女に銃口が向け

られた。

ケイスケは、最後までそれを見ることは無く、階段を上り、カミサマの祭られている場所へ辿り着いた。

そこには、巫女様が背中を向けて立っていた。

声を出そうとした瞬間、カミサマから、光弾が放たれた。

それは、彼に命中し、剣が弾かれた。

すると巫女様は、振り向き、ケイスケに話しかけてきた。

「20年間も、カミサマを恨み続けたか。そんなガラクタの体になつてまで・・・己の運命に抗うか！麻生ケイスケ！」

彼の体は、もはや人間の姿をとどめてはいなかった。

いたるところから、配線や部品の一部が出てきており、配線からは火花が散り、剣を持っていたほうの手は、さっきの光弾で無くなつてしまっていた。

それでも力を振り絞り、床に刺さる剣を、もう片方の手で握り、口を開いた。

「恨んでなんかいない……。俺は……。ただ……。妹の笑顔を取り戻したいだけだ！」

そう言つてケイスケは剣を抜き、巫女様の目を見た。

「うちに帰るぞ！エミ！」

少年の想い（後書き）

〈次回予告〉

巫女となったエミの笑顔を取り戻すため、戦い続けるケイスケ。
はたして、エミは笑顔を取り戻すのか・・・？

次回

『兄の温もり』

兄の温もり

巫女様は、長い年月をかけて、心を失い、変わり果てたエミの姿だったのだ。

その目には、光が無く、虚ろだった。

「私の家は、ここだ。今までずっとここで、カミサマの声を聞き、民を導いてきた。」

ケイスケは、体がボロボロでも、怒鳴るように言い返した。

「そういう事じゃない！巫女なんてやめて・・・うちに帰ってこい！エミ！」

エミはクスリと笑い、話し出す。

「何を言う？では、この先誰が人々を導き、正しい道へ誘っていくのだ？カミサマの声を聞き、誰が導いていけるのだ？」

「そんなことをする必要なんてない！人は・・・自分たちで未来を切り開いていけるはずだ！」

ケイスケがそう言っ、歩み寄ると、カミサマは光弾を放ってきた。体がボロボロなだけあつて、避けることはできず、剣で防御し、一歩踏み出すたびにこらえ、体を壊していく。

体の鉄板には、ヒビが入り、配線は切れ、火花を散らしている。

それでもケイスケは、エミに話しかけていた。

「エミ・・・お前は どうして・・・そこまでカミサマの・・・言いなりになる・・・？」

ケイスケは、エミに近寄っていく。

近づくにつれて、光弾の威力は増していき、一歩一歩が辛くなってくる。

でも、諦めるわけにはいかない。

「俺は・・・お前に・・・いつ・・・までも・・・笑って・・・いて・・・ほ・・・しい・・・だけ・・・なんだ・・・。」

ケイスケの音声機能が、少し故障してしまって、言葉が聞き取りに

くくなっていた。

それでも、ちゃんとエミには通じていた。

「笑う。その何の意味がある？カミサマの理想郷へ辿り着くために必要なものでもない笑顔に、何の意味がある？お前はカミサマには勝てない。去れ！」

ケイスケは、光弾に耐えながらも、近づいていく。

「俺・・・は・・・あき・・・らめ・・・な・・・い。」

「なぜだ？お前は、なぜそこまでする？」

ケイスケは・・・ついに・・・エミの目の前までやってきた。

カミサマの攻撃も止んだが、ケイスケの体は、無残な姿になっていた。

ケイスケがさらに、エミに近づくと、残った片手をそっと広げ、エミを抱き寄せた。

「な・・・何を！」

その瞬間、エミは何かを感じた。

ケイスケの体から、ガラクタの鉄の冷たさが伝わってくる。

しかし、エミには、お兄ちゃんの愛の温もりも伝わってきた。

いろいろと伝わってきて・・・エミは思い出す・・・20年前のこととを・・・。

その日、エミは友達と喧嘩をしてしまい、家のリビングのすみで、膝を抱えて泣いていた。

エミはどうすればいいのかわからず、ひたすら泣いていた。

そこに、ケイスケが家に帰ってきた。

「ただいま。」

返事がなかった・・・。エミは泣いていたから、返事をしなかった。リビングに、ケイスケの足音が近づいてきた。

そして、エミの肩に、そっと手を置き、話しかけてきた。

「どうした？エミ。」

エミは振り返り、ケイスケの目を見て言った。

「・・・ぐすつ・・・喧嘩・・・」

ケイスケは、エミに優しく笑ってあげてから、抱いてやった。その体は、とても暖かく、優しかった。

そして、ケイスケは耳元でつぶやいた。

「悲しいことは、いつまでも引つ張っていったら、もっと悲しくなる。だから・・・」

そのあと、顔を見合わせて、ケイスケはエミに言った。

「涙をふいて、笑え。笑って、仲直りをしてこい。そうすれば、泣いただけ、嬉しくなるから。」

「う・・・うん！」

エミは涙を拭き、玄関まで走っていった。

「行つてきまゝす！」

あの時の、お兄ちゃんの体の温もりを感じて、思い出した。

「・・・ぐすつ・・・」

エミは、涙を流した。心を失ったはずのエミが・・・泣いた。

抱かれたまま、エミは涙を流し、ケイスケの服をぬらしていった。

ケイスケは、エミにつぶやいた。

「お・・・かえり・・・エミ・・・」

「ただいま・・・お兄ちゃん・・・」

ケイスケは、エミに優しく笑ってあげた。

エミも、ケイスケの壊れた顔の頬を、手でさすってやり、笑ってあげた。

兄の温もり（後書き）

～次回予告～

ついにケイスケのもとに帰ってきたエミ。
だが、喜びに浸る時間は無く、カミサマが動き出す・・・。

次回

『ガラクタノカミサマ』

ガラクタノカミサマ

カミサマが急に、音を鳴らし始めた。
ジジジジジーン。

カミサマが故障してしまったようだ。

神社が、揺れだした。

「な．．．んだ．．．？」

「私が、カミサマの全データ破棄スイッチを押したの。ここはもうすぐ倒壊する。早く逃げて。」

ケイスケはうなずくと、エミの手を引っ張って、足を引きずり、歩きだした。

しかし、エミはケイスケの手を払った。

「どうし．．．た．．．？」

「私はここに残る。私は今まで、酷いことをしてしまったから．．．」

そう言っただけで悔やんでいると、ケイスケは、エミの手首をしっかりとつかみ、歩き出した。

「いつ．．．までも．．．ひっぱ．．．るな．．．。笑顔は．．．」

どう．．．したん．．．だ．．．？」

エミは、この言葉を言われた瞬間、満面の笑みをケイスケに見せた。
「うん．．．ありがとう．．．お兄ちゃん。」

エミはそう言っただけで、ケイスケに肩をかしてやり、歩きだした。

しかし次の瞬間、後ろからカミサマが、神社から分離し、ケーブルを足の変わりにして、迫ってきた。

目の前までやってくると、動きを止めて、話し始めた。

「ミコヨ。ドコエイク？ワレヲハキスルツモリナノカ？オマエハワレトモニアルハズダ。」

ケイスケとエミは、啞然としていた。

「こ．．．いつ．．．いった．．．い．．．？」

「何で・・・？さつき、破棄スイッチを押したはずなのに・・・。」
すると、カミサマがケーブルで、エミを捕らえた。

「なっ・・・！」

「ミコ。オマエハワレノモノダ。オマエトモニニンゲンヲミチビ
イテユク。ソレガシメイナノダ」

ケイスケは、剣を構えた。

「エミ・・・今・・・たす・・・けるか・・・らな・・・。」

足の鉄の骨を無理やり押し込み、一応走れるようにして、カミサマ
に剣を向け、走り出した。

カミサマの目の前で跳び、ジャンプ斬りをくらわしてやろうとした。
しかし、ケーブルがケイスケに巻きつき、包み込んだ。

沈黙が続いたが、ケイスケはケーブルを一刀両断で全て斬り払い、
本体の上に乗った。

剣先を本体に向け、一気に突き刺した。

剣を刺しっぱなしにして、カミサマから飛び降りた。
カミサマがばやきだした。

「ナゼダ・・・。ワレハゼツタイテキナソンザイナハズ・・・。ナ・
・・・ノ・・・二・・・。」

その瞬間、カミサマは、ガクンと傾き、停止した。

エミは、ケーブルから解放され、ケイスケの元へ走っていった。

「お兄ちゃん・・・ありがとう・・・。」

そう言つて、ケイスケに触れたら、バタリと倒れた。

「お兄ちゃん！？」

ケイスケのガラクタの体に、限界が来たらしく、壊れてしまったの
だ。

「お兄ちゃん！返事して！お兄ちゃん！」

必死にエミは声をかけたが、返事が返ってくることはなかった・・・。

ガラクタノカミサマ（後書き）

～次回予告～

カミサマとの戦いは終わった。
エミは最後の仕事を果たす・・・。

～次回最終話～
『エピソード』

エピソード

あの出来事から、数ヶ月後……。

停止したカミサマは、政府によって処分され、カミサマに関する全てのデータは消去された。

みんなが自分で考え、自分で行動できる社会が、ついに復活したのだ。

それから、更に数ヶ月後……。

とあるアパートでの事……。

「わかりました。すぐに向かいます。」

少女は、ガチャリと電話を切り、走りだした。

しばらくして到着したところは、修理屋だった。

「すいません……。」

少女がお店のドアを開けて声をかけると、店主がすぐにやってきた。

「おう！待っていたぜ！さあ、こつちだ。」

店主に案内されてきたところは、さまざまなパーツの置いてある修理を行う部屋だった。

そこには、カーテンがかかっていた。

「あの……。 “彼”はどこにいるんですか？」

彼女はそう言うと、店主は笑い、指差した。

「このカーテンの向こう側さ。彼もだいぶ待ち望んでいたよ。この日をな。少し言葉が話せるようになると、お前さんを気にして、ずっと喋りっぱなしだったよ。でも、今はもう完全に回復してるから、生活に問題は無いだろう。」

少女がクスリと笑うと、店主は気を取り直して、カーテンを開けるロープに手をやった。

「では……。心の準備はいいかい？」

少女がうなずくと、店主は思いつきカーテンの開いた。

その向こう側に立っていたのは、緑髪の少年だった。

「ただいま・・・エミ。」

その瞬間、彼女の目から涙が溢れ出し、彼の胸元に飛び込んでつぶやいた。

“・・・おかえりなさい・・・お兄ちゃん・・・”

エピソード（後書き）

今まで読んでくださった皆さん、ありがとうございました。
これからもがんばるので、よろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1864e/>

ガラクタノカミサマ

2010年10月11日02時54分発行